

明治末期から大正年間にかけて、青浦商会などの活躍によって本県リンゴ輸出は最盛を迎えたものの、1922(大正11)年、ウラジオストクがソビエト政権の統治下に入ると途絶している。禁止の重税が課せられたため、ウラジオストクを経由して満州に入る輸出も

# 5万トン時代へ

## 青森リンゴ輸出

7

できなくなった。  
この時期は、11(明治44)年から続く生産恐慌の時期に当たり、病害虫の大発生で生産量が半減し、輸出にリンゴを回す余力もなかった。

しかし、昭和に入ると生産が回復し、26(昭和元年)年には500万箱、その後生産量を持続し

て価格も停滞してきたことから、輸出の必要性が痛感されることになった。といっても、昭和初期の輸出はほぼそとしたものであったようだ。青森市のリンゴ移出商などが中国・上海、インドに向け、32年にはやると6万7千箱を輸出している。

31年の満州事変以来、中国各地で日貨排斥運動が起り、対象市場は中国から南洋、インド、さらに軍事力を背景に再び中国へと転身したが、37年の日中戦争の発生以降、劇的に市場拡大が図られていく。

中国大陸における日本の武力制圧によって、こ

## 戦前の繁栄期

●●●●● 戦前の本県リンゴ輸出量 ●●●●●

年	1932	35	38	39	40	41
支那	11,492	18,696	102,612	293,934	508,554	168,657
満州	2,114	2,904	6,292	32,899	337,920	
台湾	3,804	69,000	75,000	73,756	230,207	64,500
ロシア		25,800				
樺太		42,258	51,641	68,286	139,242	130,629
南洋		26,451	3,220	14,414	2,518	
印度	50,118	109,399	47,492	21,413	3,405	
その他	70	680	6,846		13,375	

単位は箱。青森県りんご百年史の資料を基に作成。青森県りんご120周年記念事業会の「激動・この20年」には1箱40斤(18kg)との記述がある

# 126万8千箱記録の年も

れを背景とした青森リンゴの未曾有の輸出増進が実現している。39年には成18)年産で2万3千箱を記録するまで6年間破

張所が開設(42年に戦局悪化で閉鎖)され、県も輸出あつせんに関わった。アメリカ産のリンゴが中国から締め出されたことも日本躍進に大きく影響したようだ。40年に126万8千箱を輸出しており、この記録は2006(平成18)年産で2万2830トとなる。この年は豊作で初めて1千万箱(約18万ト)を超えた年でもある。

しかし、1941年12月の太平洋戦争勃発とともに生産も抑圧され、輸送もままならなくなったことから、リンゴ輸出の繁栄期が終了することになった。(県りんご輸出協会事務局長 深澤守)